Ⅲ．武士が力を持ってきた時代の熊野　（今から800年～400年前）

この頃からは、貴族や寺社に代わって武士が政治の中心になってきます。熊野でも有馬氏が勢力を持ち、このあたり一帯を支配します。やがて戦国時代とよばれる時代になると、世はまったく乱れ、熊野でも戦がくりひろげられるようになります。有馬氏に代わった堀内氏は勢力を大きく伸ばし、東紀州一帯を支配します。

百年にわたって続いた戦国の世を統一するのは豊臣秀吉です。秀吉は各地の大名を従わせるとともに全国に検地を行いますが、熊野の山間部の人々はこれに反対して大規模な一揆を起こします。

大活躍した竹原八郎

神川町花知地区に「竹原八郎屋敷」の跡が残っています。今は神社になっていますが、訪れてみると、まるで「とりで」のような造に驚きます。東・西・南を高い土べいが囲み、その外側には堀がめぐらされています。この屋敷は、四方を土塁で囲んだ「方形城館」という形式の城でした。また、北側は切り立ったがけになっていてだれも近づくことができません。

竹原八郎はこの土地に本拠をかまえた武士で、後醍醐天皇が鎌倉幕府を倒すために始めた戦い「建武の新政」（今から700年近く昔）の際に、熊野の人々をひきいて伊勢平野に攻め込み、幕府方の軍勢を大いに打ち破りました。その勢いはすさまじく、「竹原八郎」の名を聞いただけで敵の軍はふるえあがったということです。この時代の出来事を書いた本に「太平記」という有名な本がありますが、この中に竹原八郎の名が何度も登場します。

屋敷の跡は、南北約45ｍ、東西約40ｍあり、ほぼ長方形の形をしています。中ほどには、南朝方の大塔宮護良親王と竹原八郎をまつる祠があり、まわりには杉が植えられています。竹原八郎屋敷が、このように完全な形で現在まで残されてきたのは、地元の人々が竹原八郎を郷土の誇りとして慕ってきたからにほかありません。南朝方のために全力をつくして戦った竹原八郎。その姿をしのぶ竹原八郎屋敷跡は、深い山の中で静かに眠っているようです。

（花知神社）元の竹原屋敷

熊野の豪族、有馬氏

有馬氏と有馬本城

室町時代から戦国時代にかけて力を持った豪族に、有馬氏があります。有馬氏は、元は「榎本」を名乗り、代々産田神社の神官をつとめてきました。有馬氏は有馬忠永の代に強力となり、北は尾鷲市行野浦から南は御浜町阿田和にいたる範囲を勢力下に収めました。有馬氏は有馬中学校にほど近い奥有馬の地に城（有馬本城）を構え、周囲ににらみを利かせました。昔の記録である古文書には、「有馬氏が一族をひきいて熊野の山間部である北山方面の豪族や阿田和方面の豪族と戦った」とあります。

（市木城跡）御浜町上市木

（行野浦）尾鷲市行野浦

有馬本城（奥有馬城ともいいます）があった場所は、今では大部分が畑となり、城跡はほとんど残っていませんが、まわりの土地よりは一段高く、「堀地」という地名が残っていることからも、ここに城があったことは間違いないと考えられます。記録によると東西110 m、南北60 mの広さをもつ、かなりの規模の城があったと想像されます。また、東･南･西に見られた石垣は、残念なことになくなってしまいました。

（有馬本城跡）現在みかん畑などになっています。今はありませんが、長らく石積が残っていました。

現在の地形から考えると、このような平地に城を構えるのは理解しにくいことです。しかし、当時は今のオレンジロード一帯は湿地帯になっていて、有馬本城はその湿地の中に半島状に突き出た形になっていました。だから、城を守るには都合が良かったと思われます。また、有馬氏が代々神官をつとめてきた産田神社はこの城の背後にあたり、神社を守る意味でもここに城を築く必要があったのでしょう。

（有馬地区に湖があった頃の様子　想像図）

有馬氏と安楽寺

有馬本城の後ろ、産田神社に隣り合う土地に安楽寺が建っています。この寺は熊野地方に存在する寺院の中では最も古いものの一つで、1444 年（文安元年）、有馬氏によって建てられています。初代の住職は周防国（山口県）から招かれた僧で、これは周防の守護大名であった大内氏が当時、紀伊国の守護も兼ねることとなり、有馬氏はその下にあった縁であると考えられます。安楽寺は有馬氏がすべてを負担したので、当初から寺にお金を出す檀家をもたず、土地の人からは「殿様寺」と呼ばれてきました。

初めて建てられた当時は、いくつもの建物が屋根を連ねる大寺でしたが、その後火災に会い、現在では再建された本堂のみが残っています。

（安　楽　寺）

有馬氏の内輪もめ

豪族有馬氏のリーダー有馬忠親

室町時代、私たちの熊野を支配していたのは有馬氏でした。有馬氏は、元は熊野三苗（榎本、鈴木、宇井）の一つ「榎本」氏で、新宮の堀内氏と並ぶ、熊野地方の有力な豪族でした。1500年頃、この地方を支配していたのは、有馬忠親でした。力のある有馬氏ではありましたが、忠親には跡を継ぐ子どもがいませんでした。次のリーダーを誰にするかはとても大事な問題でした。忠親は、おいの忠吉を養子にむかえ、殿様の地位と有馬氏の財産を譲りました。

鬼の岩屋の頂上に城を築く

有馬中学校の近くにあった有馬氏の城「有馬本城」を忠吉に譲ったので、忠親は自分の住まいが必要となりました。1523年（大永３年）頃、鬼ヶ城の頂上に、隠居のための城を築き始めました。鬼ヶ城本城は、熊野地方で最大級の山城でした。熊野古道の松本峠から約150m行くと、見張り場であったと思われる平たい所があります。ここから、木本の町並みや木本要害山城（木本小学校横の山）、そして、七里御浜、花の窟が一望できます。この城の周辺は、かつて「鬼の岩屋」と呼ばれていましたが、ここに城が築かれたことで、「鬼ヶ城」と呼ばれるようになりました。城の東・南・西は、海に突き出していて、しかも人が簡単に入ることの出来ない岩場で、天然の「とりで」でした。

＊1504年（文亀４年 永正元年） 有馬忠親は、木本に極楽寺、大雲禅寺を築いています。

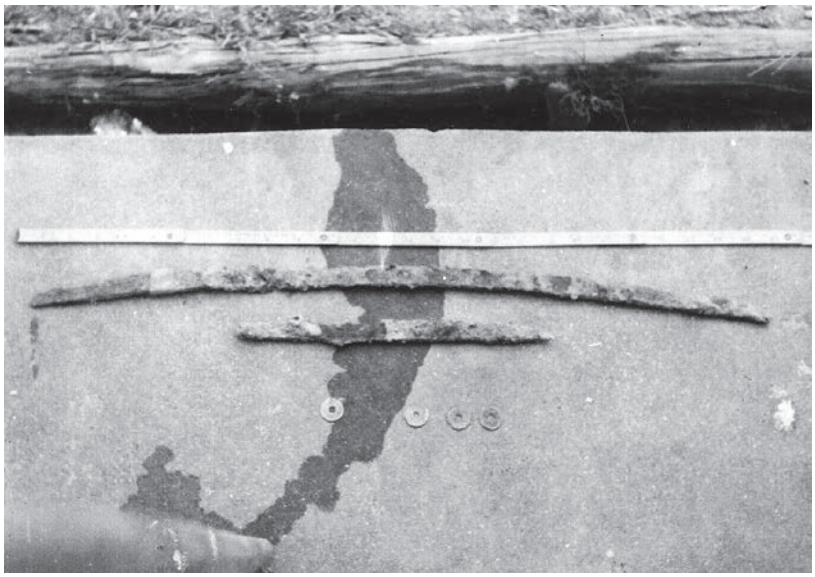
（鬼ヶ城本城跡）鬼ヶ城の頂上

忠親に男の子誕生

おいの忠吉に殿様の地位を譲って間もない1526年（大永６年）、忠親に男の子が誕生しました。忠親は息子の孫三郎を跡継ぎにしたくなりました。忠親はそう考えると、忠吉の存在がうっとうしいものとなり、「リーダーとしての資質に欠ける」などの因縁をつけるようになりました。難くせをつけられ続けた忠吉は、ついに久生屋にあった明谷寺（熊野市防災公園の下辺り）で腹を切って死にました。

忠吉の遺体と太刀を発見

有馬忠吉が腹を切った明谷寺は、明治時代の初めになくなりました。1963年（昭和38年）、忠吉が腹を切った場所とされる所が造成工事にかかりました。するとそこから、頭を北にした遺体が発見されました。また、その遺体の腹の上には長さ77.5cmの太刀が置かれていました。忠吉の遺体と思われます。



（忠吉が腹を切った太刀）

（忠吉のお墓）

忠吉の親族や家来の反発

有馬忠親の態度に、忠吉の親族や家来たちはとてもいかり、忠親のいる鬼ヶ城本城を激しく攻めました。忠親はこの攻撃を防ぎきれず、命からがら城を脱出しました。なおも攻撃が続き、追いつめられた忠親は、逃れた先の三木城（尾鷲市三木浦町）で腹を切り死にました。

忠親の死後、有馬一族は対立する新宮の堀内氏にすきを見せてはいけないと、相続問題を真剣に話し合いました。その結果、忠親の子 孫三郎が有馬氏のリーダーにおさまることとなり、有馬氏の内輪もめはここに終わりました。

（有馬忠親が逃げ込んだ「三木城跡」）　尾鷲市立三木小学校跡　尾鷲市三木浦町

有馬氏、絶える

決着した有馬氏の内輪もめでしたが、肝心の孫三郎が25歳の若さで亡くなり、神官榎本氏以来、奥熊野で勢力を張ってきた有馬氏もここに至ってとうとう血脈が絶えることになりました。

有馬一族は、協議の結果、これまで対抗関係にあった新宮堀内家の氏虎の二男でわずか８歳と幼い楠若を養子に招いて、家の存続を図ることにしました。

この頃の奥熊野

はるか昔の熊野の国は、東は紀北町紀伊長島区近くの荷坂峠を国境としていました。しかし、645年（大化元年）の大化の改新のとき、国の配置が変更され、二木島町のＪＲ二木島駅近くを流れる逢川あたりをもって紀伊国と志摩国の国境とするようになりました。

二木島に残る熊野古道「曽根次郎坂太郎坂」があります。この坂を境に「自国の領地、他国の領地」という意味で、「自領坂･他領坂」というようになり、これがなまって「次郎坂太郎坂」と呼ばれるようになったといわれています。この峠に紀伊国と志摩国の国境があったものと思われます。

＊　国境についてはいろんな説があります。
当時、川を国境とする例はまれで、峠を国境とすることが多かったようです。

堀内氏の台頭

堀内氏善

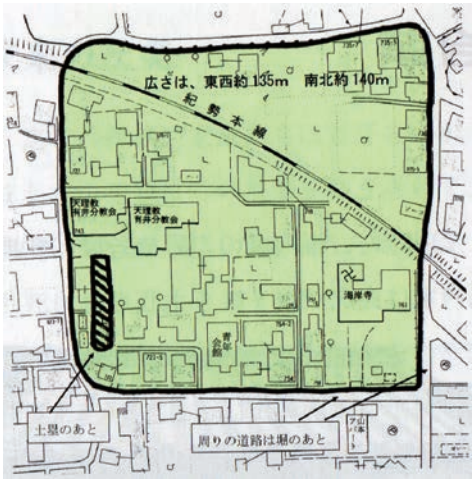
私たちの熊野を支配していた有馬孫三郎は、25歳の若さで亡くなりました。当時、対立していた新宮の殿様 堀内氏虎の二男 楠若が有馬氏の養子として入り、「有馬忠勝」を名乗りました。このとき忠勝、８歳の幼い少年でした。

忠勝の父 堀内氏虎が死ぬと、忠勝の兄 氏高が新宮堀内家を継ぎます。しかし、氏高は堀内家を継いで間もなく亡くなってしまいました。新宮堀内家に跡を継ぐ者がなく、結局、有馬忠勝は有馬･堀内両家を継ぎ「堀内安房守氏善」を名乗りました。ここに、堀内家は、今の新宮から熊野にまたがる一大勢力に成長しました。堀内氏の城は、江戸時代に熊野地方を治めた新宮水野氏のお寺 全龍寺にありました。全龍寺がかつて城であったことは、裏に残った堀を見ればうなずけます。

（全龍寺）新宮市千穂

豊臣秀吉の時代、私たちの熊野を支配していたのは、堀内氏善でした。1582年（天正10年）、氏善は、九鬼、尾鷲、長島に進み、その地の支配者 加藤甚五郎と戦いました。氏善は、この戦いに勝ち、荷坂峠までを自分の領地とし、長島村（今の紀北町紀伊長島）までを紀伊国の牟婁郡に編入しました。堀内氏はこの頃一番勢力が強大で、西は古座（和歌山県串本町古座）から、東は紀北町の荷坂峠までと領地を広げていました。

氏善は、せまくなった有馬本城の東に、新たに城を築き始めました。現在の海岸寺や天理教有井分教会がある辺りで、東西200ｍに及ぶ大きな城（口有馬城）です。



（口有馬城の範囲）

朝鮮に出兵

堀内氏善が熊野地方を支配すると、豊臣秀吉から領地を認められました。1588年（天正16年）の「北山一揆」の際には、氏善は一揆をしずめることに力を注ぎました。

1593年（文禄２年）正月早々に豊臣秀吉は、熊本の殿様 加藤清正ら西日本の大名を主力とする15万人もの大軍を朝鮮に送りました。朝鮮出兵です。このとき、氏善は兵850人を引き連れて戦いに参加しました。

関ヶ原の合戦に敗れ、熊野の領地のすべてを失う

朝鮮出兵の７年後の1600年（慶長５年）、天下分け目の「関ヶ原の合戦」がおきました。石田三成の西軍と徳川家康の東軍との戦いです。氏善は、石田三成の西軍につきました。なぜ西軍についたかというと、「氏善の妻が志摩国の殿様 九鬼嘉隆の娘であった」からでした。とは言っても、九鬼嘉隆の息子 九鬼守隆は徳川家康の東軍についています。西軍東軍両者の様子を見るために親子、兄弟が敵となったケースは他にもありました。

関ヶ原の合戦は、徳川家康の東軍が勝ちました。この合戦で西軍につき敗れた氏善は、熊野に逃れました。一時、紀宝町相野谷の大里にある京城に入りましたが、和歌山城の殿様 桑山一晴らに攻められ、氏善は九州に落ちのびました。ここに氏善は熊野の領地すべて失うことになりました。氏善は有馬の海岸寺辺りに「口有馬城」を築いておりましたが、完成にはいたりませんでした。

（かつてあった口有馬城の土塁の跡）

氏善は九州・熊本へ

氏善は、徳川方の東軍についた熊本の殿様 加藤清正に助けを求めました。清正は、朝鮮出兵のときに氏善の助けを受けたことがあり、恩返しの意味で氏善を家来としてむかえました。氏善は、清正が持っていた宇土城の城代となりました。

1611年（慶長16年）６月24日、氏善は熊本で病死しました。熊本県宇土市にある三宝院の氏善のお墓には、「紀州室郡 藤原朝臣安房入道」の文字が刻まれています。

（堀内氏善の供養塔　安楽寺内）

北山一揆

―豊臣秀吉の検地に抵抗した熊野の山村の人々―

北　山

熊野市の山間部、五郷・神川・育生町から紀和町にかけての地方を、古くは「北山」とよびました。これは、この地方が東紀州の中心である新宮から見て北方の山間にあることからそうよばれました。

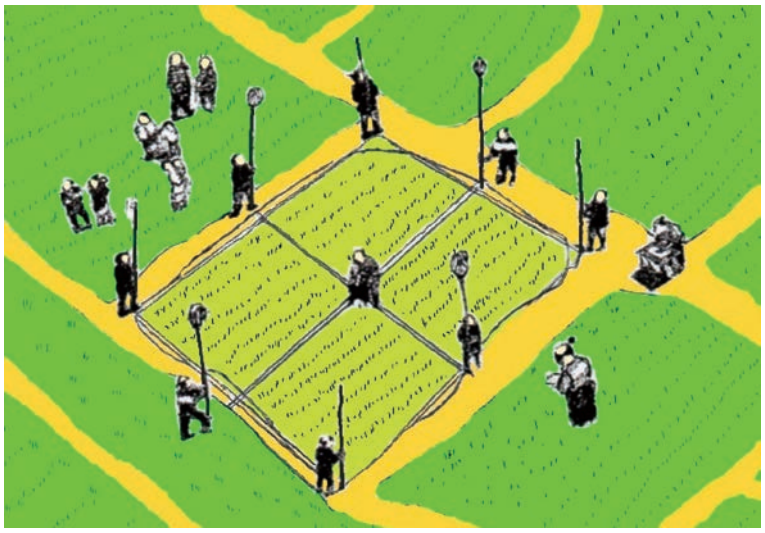
北山地方は山がけわしく、平地は川沿いのわずかな部分にしかありません。したがって、食料の生産が非常にとぼしく、人々は山の斜面に棚田（階段状に続く田）を開こんしたり、木材を新宮まで流して売ったりして生活を支えてきました。

（北山地方）

秀吉の天下統一と検地

戦国時代の頃は決まった領主もなく、土地の有力者がこの地方を治めていたものと思われます。

織田信長に代わって天下統一にのりだした羽柴（後の豊臣）秀吉は、大名たちを従えるとともに、農村の支配をかためるため、検地を行いました。田畑の面積・米の取れ高・耕作者をくわしく調べて、確実に年貢を取り立てようと考えたのです。検地にのぞむ秀吉の態度はきびしく、検地役人に対して「もし検地に反対する者がいれば、村中みな殺しにせよ。」と命じたほどです。



（検地の様子）

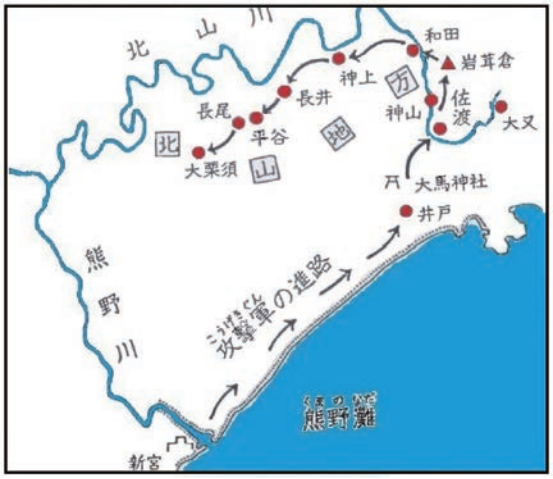
北山一揆

北山地方はこれまで米の生産がとぼしいので、年貢は木材などで納めてきました。秀吉の検地の「二公一民」（取れ高の３分の２が年貢、３分の１が百姓分）の定めは、貧しい山村の人々にとってはあまりにもきびしいものでした。北山の人々は、秀吉の検地に対してはげしい反発を示し、一揆を起こしました。

百姓たちは武器を持ち寄り、北山地方の入口にあたる岩茸倉山頂にたてこもりました。岩茸倉は標高800ｍの山で、南側は60ｍの絶壁、周囲は深い谷に囲まれた天然の要さいです。

1588年（天正16年）、秀吉は「北山征伐」を命令しました。秀吉の弟 豊臣秀長の家来、吉川平助・吉川三蔵及び新宮城主堀内氏善に3500人の兵をつけて北山攻めを開始しました。

攻撃軍は現在の井戸町大馬神社のあたりから飛鳥町に入り、神山・佐渡・大又などの村々に攻撃側に協力するよう要求しました。土地の百姓どうしで戦わせようと考えたのです。村を焼かれることを恐れたこれらの村々はやむなく協力しました。



（攻撃軍の進路）

岩茸倉・和田堤の戦い

1588年（天正16年）９月、吉川・堀内軍は、味方になった百姓たちを先頭に立てて岩茸倉に攻めかかりましたが、けわしい斜面と北山方の落石攻撃のため、いっこうにとりでに接近することができません。木々がじゃまをして鉄砲の射撃も威力を発揮しません。

そこで、攻撃軍はわざと敗れたふりをして、いったん山を下りることにしました。そして、数日後の夜明け前、ひそかに一揆方である北山方の陣に近づき、一斉にときの声をあげて百姓たちにおそいかかりました。一揆方はけんめいに戦いましたが、とうとう支えきれず、和田堤まで後退していきました。和田堤のとりでの中は、深手を負った百姓のうめき声と、したたり落ちる血のにおいに満ちていました。せまり来る戦いへの緊張感のためか、だれ一人言葉を発する者もいません。

（五郷町和田）攻撃軍はこの辺りを渡ったと思われる

夜が明けると、とりでは吉川・堀内軍にすっかり取り囲まれていました。百姓たちは思わず身ぶるいしました。やがて、寄せ太鼓の音が鳴りわたると、攻撃軍は一気にとりでにせまってきました。一揆方は手に手に武器を構えると、勢いよくとりでの外に打って出ました。いたるところですさまじい戦いが展開されましたが、敵の鉄砲射撃の前に、一揆方の北山方の百姓は次々と殺されていきました。

（一揆の様子）

北山の平定

岩茸倉・和田堤で一揆方を打ち破った攻撃軍は、さらに進んで神上の要害山とりでを陥し、育生の万重寺を焼き、平谷を経て大栗須（紀和町）に侵入し、土地の名族 入鹿氏を滅ぼしました。

何ヵ月にもわたる「北山征伐」は、この地方の村々に深いつめあとを残しました。父を殺され、家を焼かれた家族の数はおびただしい数にのぼりました。また、由緒ある寺や神社の多くも、その貴重な文物とともに焼かれてしまって、現在に残るものはほとんどありません。山深い北山の村々の天正16年（1588年）は、悲しみと恨みの涙のうちに暮れていきました。

処　刑

明けて1589年（天正17年）、北山地方の木材を京・大坂（現在の京都・大阪）へ運ぶため、秀吉は藤堂高虎（後の津藩主）を材木奉行として北山に送りました。高虎は、大勢の百姓を動員して、現在の紀和町赤木の地で城の建築にかかり、その年のうちにほぼ完成させてしまいます。

（赤木城跡）

高虎は盛大な落成披露を行うことにし、村々に触れを回しました。

「このたび、赤木城がめでたく完成のはこびになった。ついては、村の主だった者は残らず城に祝いに参るように。先年の一揆に参加した者も、これを許すから安心せよ。」

定められた日、城の中庭は、村々から出てきた百姓たちであふれました。百姓たちは生まれて初めて見る城の大きさにため息をつきました。が、平和はここまででした。突如、城の門が閉じられ、槍を構えた兵が百姓たちを取り囲み、一揆の参加者に次々縄を打ちました。捕まった百姓たちはそのまま田平子峠（紀和町）まで引かれて行き、全員処刑されました。その数160人と言われます。

（田平子刑場跡）

「行たら戻らぬ赤木の城へ。見捨て所は田平子じゃ。」

だまされ殺された百姓たちの無念さを今に伝えるうたが、山間の村々に歌い継がれています。

時代は下って太平洋戦争(1941年～1945年)中、日本軍の捕虜となったイギリス兵たちが、このあたりの道路工事に駆り出されたことがありました。そのとき、田平子付近で人骨らしきものを、何体も発掘したといわれます。

赤木城跡

赤木城跡は、紀和町赤木地区の北側、赤木川そばの小高い丘の上にあります。「人」の形をした丘の上に造られた、天正年間（1573 年～ 1592 年）の特色をよく残した城跡として国の指定史跡になっています。

赤木城は、豊臣秀吉の弟 豊臣秀長が、反発する熊野・北山一揆を押さえ、この地方を統治するために藤堂高虎（後の津藩主）に命じて築いたとされています。

赤木城跡は、それまでの空堀と土塁を使った「土の城」とはちがい、当時の最新技術である石垣・郭・礎石建物が用いられています。これらが 400 年を経た現在にも築城時の様子をよく伝え、石垣には野面乱層積みや算木積みの特徴がはっきりと見られます。

（赤木城 主郭）

（野面乱層積み）

赤木城跡は、大きく東郭、主郭虎口、主郭、北郭、西郭、南郭から成り立っています。丘の頂上に28ｍ×23ｍの台形の主郭を置いています。主郭の南東には、３つの方向から侵入者を攻撃できる枡形の虎口が設けられています。主郭の南東の尾根上には２段からなる東郭が、南西の尾根上には３段からなる西郭があり、これらにはさまれた谷には３段からなる南郭があります。また、主郭の北には北郭があり、その先は堀切に通じています。

赤木城跡の規模は大きくありませんが、中世の城の特徴である堀切や空堀を持つ一方、全て野面乱層積みの石垣で造られており、石垣を上る敵を側面から射る仕組みの横矢掛けがあるなど、近世の城の特徴を持つ全国でも貴重な城跡の一つです。

織田信長、加藤清正、藤堂高虎は、築城の名手といわれています。その築城の名手 藤堂高虎が築いた赤木城は、高虎が築いた城でも初めの頃のものと言われています。そのため、お城マニアからは、「赤木城を見ずに、高虎の城を理解したことにはならない」とまで言われています。

（空から見た赤木城 全景）

（赤木城の算木積み）

（雲海の中の赤木城）写真 小林良美

（算木積み）